

孤独を超克する「信義」——『雨月物語』『菊花の約』小考

加藤十握（国語科教諭）

要 旨

『雨月物語』『菊花の約』の主題は丈部左門と赤穴宗右衛門の「信義」にあるが、それと冒頭末尾の警句的言辞との間に違和が生じているとされてきた。本論では、左門や宗右衛門たちの、貧困や孤独から生きる証しを求めてすがった「信義」と、身を翻して尼子経久に従う赤穴丹治をはじめ多くの者たちの「軽薄」との対比が本話の主題に通底することを確認し、同時代における読みの可能性までを論じた。

キーワード

上田秋成 雨月物語 菊花の約 軽薄 信義 貧交行
孤独

一 はじめに

上田秋成による「菊花の約」は、『雨月物語』のなかでもとくに研究史の豊かな蓄積はあるものの、依然として主題レヴェルでも定まった解釈が行われているとは言い難い作品である。本論は、その「菊花の約」の登場人物のおかれた境遇に焦点を当てることによって、従来の解釈上の違和を解消することを試みたものである。

はじめに、物語の梗概をやや詳しく記すこととする。その際に、本論に取りあげる際の便宜を図り、内容を五つの意味段落に分けた上で、それぞれの冒頭にアルファベット記号を付す。

A 軽薄な人と交際してはならない。軽薄な人は、交際しやすくともまた簡単に別れてしまうものである。

B 播磨国の加古駅に支部左門という博士がいた。清貧をもっぱらとし、書物のほかは見向きもしない。老母は、糸紡ぎを仕事として左門の学問への志を助けていた。妹は、同じ里の佐用氏に嫁いでいた。佐用氏も左門の母子の賢いことを慕っている。いろなものを贈ってよこしたが、左門は、他人に世話になるまい、と取返して受けなかった。

ある日、左門が同じ里の何某のもとを訪ねて話をしていた時、隣の部屋から苦しむ人の声が聞こえた。その声の主である西国

の武士は、その夜から発熱して起居もままならない。左門は気の毒に思い、周囲が伝染病と恐れるのを一笑し、自ら煎じた薬を与え、兄弟のごとくに手厚い看護をした。その武士は、左門の陰徳に感じて自分の素性を以下のように明かす。もとは出雲国松江の産となる赤穴宗右衛門、兵法家として富田城主塩冶掃部介に兵法を説いていたが、近江の佐々木氏綱のもとへ密使につかわれて、佐々木の館に留まっているうちに、前の城主尼子経久が山中党を騙して大晦日の夜に城を奪取してしまい、掃部介も討ち死にした。出雲は佐々木の領国であり、塩冶は守護代であったので、三沢、三刀屋を助けて尼子を亡ぼすよう氏綱に進言したが、氏綱は愚将であって、動かないどころか、逆に宗右衛門を近江に留めた。そこで自分一人で脱出し、この場に至った、と。左門も、もう少し留まって養生しよう論したところ、日を経るにつれて平癒していった。

左門と宗右衛門はお互いの学問を披露して意気投合し、ついに兄弟の盟を結んだ。宗右衛門が五歳長じていたので、兄である礼儀を受け入れて、左門の母に挨拶を願ひ出した。左門の孤独を心配する老母も喜び、宗右衛門も、立派な男は義理を重んじ、功名富貴は二の次であると、老母や左門に敬われていることに感謝して、しばらく逗留した。

夏の初めごろ、宗右衛門は出雲へ出立することになる。左門が、戻る日時を問うと、重陽の節句と答えた。そこで、左門は菊花に薄酒を備えて待つことを約束した。

C 九月九日、左門は約束した通りの支度をして待った。その日、左門も旅ゆく人々の会話を上の空で聞きながら待ち呆けた

が、夜になるまでついに姿は見えない。あきらめて家内に入ろうとしたところ、ついに宗右衛門が現れた。歓待する左門に宗右衛門は無言で応じていたが、ついに宗右衛門は自分がこの世のものではないことを明かした。

左門が大いに驚きそのわけを尋ねると、宗右衛門は出雲の情勢を語る。そこでは、城下の者は尼子側について塩冶の恩を顧みるものはおらず、従弟の赤穴丹治を富田城に訪ねたところ、尼子経久は兵士をよく率いているとはいえ、心服する家来はいない。自分が左門との約束を伝えて去ろうとすると、経久は丹治に命じて自分を幽閉して今日に至った。そこで、魂千里を行くとのことを思い出し、自刃して陰風に乗ってやってきた、と。そして涙を流しつつ、よく老母につかえよ、との言葉を残し、宗右衛門は消え去ってしまった。

左門は号泣し、老母が気づいた時は酒肴の中にうずもれて倒れていた。左門は老母に出来事を語り、二人で泣き明かした。

D 翌日、左門は、自分は学問の世界で忠義の評判も得ず、孝信をつくすこともせず、無為に生きてきたが、宗右衛門は一生を信義のために尽くした。よって、私はせめて出雲に向かつて骨を葬って信義を全うしたいと、出雲行きを決心を老母に語った。そして、佐用氏に老母の介抱を依頼し、出雲国に向かう途中、夢に泣き明かしつつ十日で富田城に到着した。

左門は、先ず丹治を訪ねて言った。武士は富貴盛衰のどちらも重んじず、ただ信義を大事とするもの。宗右衛門が守った信義に報いて、自分はここに来た。魏の公叔座と商鞅の故事とを比べて、丹治と宗右衛門の場合はいかがか、と。すると丹治は

うなだれて、言葉もない。宗右衛門は塩治との旧交を重んじて尼子に仕えなかったが、義士であった。一方、丹治が尼子にこびて従弟を苦しめ、横死をさせたことは信頼に値しない。尼子が強いて留めたとしても、旧交を思えば私的に公叔座と商鞅のような信義を尽くすべきなのに、營利に走って武士の家風がないならば、それは尼子の家風同然である。ならば、宗右衛門はどうしてこの国に留まれようか。私は、信義を通してここまでやってきた。おまえは不義理の汚名をのこせ、と左門は言い、丹治を一つ刀に切り伏せた。そして郎党どもが騒ぐ中足早に逃げ出して、行方知らずとなった。尼子はそのことを聞き、信義の篤いことを憐れんで、左門を敢えて追わなかった。

E やはり、軽薄な人と友好を結んではならない、ということなのだ。

二 「軽薄」と「信義」について

前章梗概A、物語の冒頭は以下のように開始される。

青々たる春の柳。家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも。秋の初風の吹に耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

「菊花の約」物語が中国白話小説の『古今小説』「范巨卿鶏黍死生交」（以降、本論では「死生交」とする）の翻案であることは周知の事実であるが、冒頭の文章も「死生交」の冒頭、

種樹莫種垂楊枝、結交莫結輕薄兒。楊枝不耐

秋風吹、輕薄易結還易離。（注1）

の忠実な翻訳となっていることは明らかである。「菊花の約」では、この冒頭と同内容の文章が、物語の結尾にて「咨輕薄の人と交はりは結ぶべからずとなん」と繰り返されていることによつて、読者は、「輕薄」な人物との交流を戒める教訓的な内容を想像しながら読むことになるであろう。一方で、梗概B、Dから、本話の主題は丈部左門と赤穴宗右衛門との「信義」にあることに異論の余地はない。問題は、登場人物二人の間の「信義」を軸にした本話と、冒頭末尾の教訓的言辭との間の内容的な連関性が曖昧であることによつて、様々な解釈の余地が残されてしまっている点にある。

ここで、本話の主題に関わる先行論文の論点を、三浦一朗の整理（注2）によつて確認しておきたい。

① 本編を丈部左門と赤穴宗右衛門とが信義を貫く美談とする立場

② この二人を人格的に各々何らかの欠陥を備えた人間として捉え、その関係も批判的に描かれていると見る立場

③ 二人が信義を貫いたのは確かだが、それはあまりに厳格、極端なものであつて読者に違和感を与えるように描かれていると捉え、作品は二人の信義を相対化しているとする立場

流れとしては、松田修（注3）、木越治（注4）の各論を画期として、②、③のように、二人の間の純粹な「信義」の物語を批判的に読むところから出発した結果、とくに近年は、B、Dの登場人物における「輕薄」な人物探しに論点が定められて

きているのだが、煩雑になるのでここではその経緯を再説しない。

ところが、最近になって山本秀樹が、近年の主流であった左門や宗右衛門の人格欠陥説についてもかなり手厳しい批判を加えた上で、「結局われわれはまず、テキストを正視し、テキストの意図を汲もうとすることから始めなければなりません（注5）」と述べた。そこで、本論でも、これまでの先行論の論点は視野に入れつつも、出来るだけ初心に返ってテキストを正視しながら論を進めて行きたい。

そこで、あらためて「軽薄」の語義に着目する。「軽薄」の語義についてはすでに飯倉洋一が、その近世的な語義を「誠実さにかける言葉だけの追従、表面的な媚び諂いというイメージ」と捉え、それに相応しい人物は作中に見出しがたいとした（注6）が、念のため『大漢和辞典』によってその語義を確認しておく。

- ① うはべだけでまごころが少ないこと。軽佻浮薄。かるがるしくてまごころが少くないこと。権勢利益のために義理を欠く者。敦厚ではないこと。
- ② かるんじうとんずること。粗末にすること。
- ③ かるくうすい。値打ちが少くない。

なかでも引かれた用例数より①が主要な意味かと思われるが、その用例より杜甫の「貧交行」（注7）に着目する。

翻_レ手作_レ雲覆_レ手雨（手を翻せば雲と作り手を覆せば雨）
紛紛_レ輕薄何須_レ數（紛紛たる輕薄何ぞ數ふるを須ひん）
君不_レ見_レ管鮑貧時交（君見ずや 管鮑貧時の交はり）

此道今人棄如_レ土（此の道今人棄てて土の如し）

前半二句の江戸期における解釈は、服部南郭『唐詩選国字解』巻二に「人時ノ輕ハヅミニ頼ナイト云フハ掌ヲ忽チカユル事ヲ云」（注8）とあるごとく人情の移りやすさを詠み、後半二句はそれに対して「管鮑貧時交」の世界を理想として引き合いに出しつつ、現代の人はそうした友情を土に棄てるがごとく軽んじることを憂いている。その「管鮑貧時交」は『史記』「管晏列伝第二」の冒頭に見えるものだが、以下に南郭の注を記す。

古へ齊ノ管仲ガ貧乏ナ時鮑叔ト云フ者ト言ヒ合セテアキナヒヲシタガイツマデモ鮑叔ヲダマシテ我バカリ利ヲトツタサレドモ鮑叔ハ腹ヲ立タズヲ管仲ハ貧乏ヂヤカラソノハヅノ事ト云テ中ヨク交タマタルトキ喧嘩ヲシテタ_レカレテ帰タ人々臆病者トテソシリシガ鮑叔ハ管仲ガ老母アルユヘ尤ナル事トテマス々親シミタリ ソレユへ鮑叔ガ死セントキ我ヲ生ミシ者ハ父母我ヲ知タル者ハ鮑子ト嘆シトナリソノヤウナ道ハ今時ノ人ハ捨キツテ土ノ如クニ思フテアル鮑叔の人物の優れていたところは、幼なじみであり自分が才能を認めた人物が、あまりの貧しさに目先の利益にとらわれながら自己中心的でよこしまな行動に出ても、最後までその人物を認め抜いたことである。鮑叔は、最後まで幼なじみとの「信義」を通したとも言えよう。そうであるならば、「貧交行」詩における「軽薄」語の対義は「管鮑貧時交」に記された鮑叔の行動に表れた「信義」の精神である。井上泰至は「原抛ならびに「菊花の約」の「軽薄」は、「誠意」即ち「信義」の有無が顧慮されてしかるべきなのである。」（注9）と指摘したが、人がその

「誠意」や「信義」を失いやすいのは、『大漢和辞典』が「権勢利益のために」と記すごとく、功利に走りがちになった時であると言える。以上を念頭におき、次章では登場人物の人物設定を論じる。

三 左門と宗右衛門の人物設定について

梗概Bにおいて、丈部左門は以下のように記される。
播磨の国加古の駅に丈部左門という博士あり清貧を憩ひて。友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。

そうした左門の性情ゆえ、丈部の家計は老母が支えていた。また、左門の妹は土地の富裕な佐用氏に嫁いでいるが、その佐用氏からの援助も左門は「口腹の為に人を累さんや」と拒否している。左門は、ひとり「清貧」をうたつて学問への道を志していたが為に、丈部の家を支える意志は薄弱であった。その点では「死生交」において、

姓張、名劭、字元伯、是汝州南城人氏。家本^二農業^一、苦志^二讀書^一、年三十五歳、不^二曾婚娶^一。其老母年近^二六旬^一、並弟張勤努^二力耕種^一、以供^二膳^一。

と記されるように、張劭が農業の家に生まれながらも学問を志し、齢三十五に達しても嫁を迎えず、家業もせず、弟の張勤と老母がそれを支えていたとの設定と同様であるとみてよいだろう。また、そうした左門の現状について、左門の老母は常に彼の「孤独を憂」いていた。左門は清貧であるが、「孤独」であったのである。

ところがある日、偶然左門が同郷の「何某が許」を訪ねたときに、流行病を患い旅宿していた赤穴宗右衛門を知って、看病することになる。その赤穴宗右衛門の人物設定については、梗概Bに記した通り、看病の末に病状の安定を見たとき宗右衛門自身が左門に語った内容によって知られる。出雲国に向かう途中に発病した宗右衛門を左門が介抱することになったのだが、その際に学問的な交流が生じ、二人はついに「兄弟の盟」を結ぶに至る。このときの宗右衛門はすでに父母に死別し、出雲国での主を失い、佐々木氏綱にも落胆して出奔したため、孤独な身の上であったと思われる。

やがて、「兄弟の盟」を結んだ二人が、左門の老母に面会する。すると老母は、
吾子不才にて。学ぶ所時にははず青雲の便りを失なふ。ねがふは捨ずして伯氏たる教を施し給へ

と、左門が「不才」であるためにその学問が時代に合わず、立身出世の機会を失っていることを訴え、宗右衛門に「伯氏たる教え」の教授を依頼した。それに応えて宗右衛門が、「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足ず」と述べて、立身出世よりも信義を重んじるべきとの「教え」を伝授する運びとなる。

以上の状況を踏まえつつ、左門と宗右衛門が「兄弟の盟」を結ぶまでに至る出会いの高揚感の淵源を辿ると、お互いの孤独心に行きあたるように思えてくる。そこに左門の「知識人の生が強い孤独」を読んだのは青木正次であるが（注10）、宗右衛門も、森山重雄が「宙ぶりの状態」（注11）と言うように孤独な身であった。だからこそ、二人の心が学問を媒介として「ひ

とつとして相ともにたがふ」ところなく一致して行く。その抛り所となったのが、宗右衛門の「信義」の「教え」である。しかし、その背景には、立身出世を望むどころか、社会からも切り離されて生きる糧を失いかねない厳しい状況があった。その点は、信義を全うせんと生きる二人のその後の関係を理解する上で、大変重要であると考ええる。更に付言すると、「死生交」の張助と左門の設定は類似しているが、范式と宗右衛門の設定には看過せざる相違がある。それは「死生交」に、

姓范、名式、字巨卿、年四十歳。世本^二商賈^一。幼亡^二父母^一とあるごとく、范式が妻帯者である点である。「死生交」での范式は商売をする者であつて、妻子がいるために学問は不如意であるとされ、結果として、そのことが范式を蘇州山陽に留めさせる最大の要因になるのであるが、宗右衛門の設定にそうした要素は見られない。次章に詳説することく、妻子を有する范式と、孤独な身の宗右衛門との設定の相違は、本話の主題を捉える上で注目すべき要素であると、筆者は考えている。

四 約束の日まで

宗右衛門の病も平癒し、「雲州の動静を見んため」宗右衛門は再び、「菽水の奴に御恩をかへしたてまつる」ために、「重陽の佳節」に戻ることを約束し、出雲に立出た。「菽水の奴に」は、「極めて貧しいながらもお仕えして」との意味であり（注12）、この二人の再開は、立身出世を成し遂げることや経済的

な安定を度外視して、義理を通すことに主眼があったことは言うまでもない。それにしても、「兄弟の盟」に反してまで宗右衛門は出雲にて何を見ようとしたのだろうか。近江の佐々木氏綱に、旧主の敵である尼子経久を滅ぼすことを進言して適わなかったことを宗右衛門自身が述べたことから推測すると、旧主の敵を自らとろうと企てての視察であつたことは想像できるが、どこまでの覚悟がこの時点での宗右衛門にあつたのかは不明である。

さて、約束の「重陽の佳節」を迎えた。左門は、「囊をかたぶけて」酒、食の用意をしている。待ちわびる左門の目に入ってくるものは、山陽道をせわしく行き交う人々の光景だが、それさえも目に入らない様子。そうした左門の目に映つたはずの、山陽道を往来する人々の情景描写は、再会を心待ちにする左門の心情を記す場面としては些か唐突な印象をぬぐえない。往来する人々の発言は、その内の一人の「此度の商物によき徳とるべき祥になん」に象徴されるように、経済活動を行う者たちの損得勘定が主な話題となつている。例えば、そのうちの「五十あまりの武士」の発言は次の通りである。

日和はかばかりよかりしものを。明石より船もとめなば。この朝びらきに牛窓の門の泊りは追べき。若き男は劫物を怯して。銭おほく費やすことよ

この武士は、天候を見誤つて船繰り計画を誤つてしまった若い男に対して、無駄金を弄した事へ苦言を呈しているのだが、それらの通行人は、いずれも本話の物語に直接関与しているわけではない。高田衛らはこの場面について、「左門の心情を、街

道の情景によつて、逆説的に書いたと言えるかもしれない（注13）として、左門の心情との関連を読み取ろうとしている。また、鶴月洋らは、ここに「いわば『間』とも『遊び』ともいふべきテクニク」（注14）が見られると説いた。しかし、いずれも物語展開との積極的な関連を説明してはいない。左門は宗右衛門を待ちわびるあまり放心状態にあつたのであるから、むしろ目に映らなかつたのは当然であるとも言える。だが、道行く者たちの会話がそれぞれの経済活動に関する話題であることに注意すれば、それが耳に入らないような左門の経済活動への無関心は、物語冒頭から一貫していた。それどころか、ただでさえ無関心であつた経済活動に対して、宗右衛門との出会いを切つ掛けにして、より盲目的に「信義」に拘泥してしまう左門（あるいは二人）の状況をも、この場面が暗に示しているのではないだろうか。

このように、宗右衛門との約束を盲目的に信じて待つこと、更には後述するように、友の死を知つて咄嗟に出雲に向かう行動などからは、左門の直情径行が読み取れるのだが、そもそも左門や宗右衛門は、世を渡る上で必要な経済活動へコミットする環境を自ら絶つてしまつていたのであるから、お互いの「信義」にすがつて生きる道しか残されていなかったのである。そして、まさにそうした彼らの境遇こそ、本話の読者が違和感を覚える点なのではないだろうか。

ところで、左門と別れて出雲に到着した宗右衛門が、富田城において尼子経久、および従弟の赤穴丹治に幽閉された事情は梗概Cに記したとおりである。そこにおける、左門との再会の

約束を破る事情が「死生交」のそれと乖離していることは前章結尾で指摘した通りであるが、「死生交」では、范式自らがその事情を以下のように説明されている。

自_下与_二兄弟_一相別之後_上、回_レ家為_二妻子口腹之累_一、溺_二身商賈中_一、塵世滾滾、歲月匆匆、不_レ覺又是_二一年_一。向日鷄黍之約、非_レ不_レ掛_レ心、近被_二蠅利_一所_レ牽、忘_二其日期_一。

ここでは、妻子を養うために商売の瑣事に気をとられている内に、気がつくくと約束の期日を忘れてしまつていて、「此心如_レ醉」状態となつたと説明されている。つまり、范式は家族を養うための生活に翻弄されて約束を失念したのであつた。一方で、宗右衛門の状況は、「狐疑の心」の多い人格への不信から、「腹心爪牙_が」^を、即ち心から慕う家来どもがいない経久の許から「永く居りて益_{やう}な」しと見限つて出国を決心した時に、「賢弟が菊花の約ある事をかたりて去んとすれば。経久怨める色ありて」丹治を遣つて幽閉したと語られている。宗右衛門は、信頼するに足りない経久の有様をその目で確認し、そこで旧主の敵を討つわけでもなく、出国の決断をするのである。「死生交」の范式と違って、孤独な宗右衛門が出雲に留まる必然性は何も残されていなかった。

五 左門の決断と行動

約束の日、左門の目前に現れた宗右衛門の霊の述懐を受けて、自死の行為を宗右衛門の「信義」の証しと理解した左門は、出雲行を即断して老母に決心を伝える。

吾幼なきより身を翰墨に托るといへども。国に忠義の聞えなく。家に孝信をつくすことあたはず。徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の為に終る。小弟けふより出雲に下り。せめては骨を蔵めて信を全うせん。

学問でもうだつが上がらず、家でも老母に尽くしきれず、中途半端な自分の存在のふがいなさを吐露し、その鬱とした思いを振り払うようにして、宗右衛門への「信」を「骨を蔵め」ることによってまっとうすることを宣言したのである。そうして老母の心配を余所に、道中は「飢て食を思はず。寒きに衣を忘れて。まどろめば夢にも哭あかしつゝ」、「信」の一語を胸にして無我夢中に出雲国に向かう左門の行動は、強い衝動に駆り立てられたがゆえのことであると思われる。

ともあれ、一目散に出雲国に到着した左門はまず従弟の赤穴丹治を訪ねて伝えたその言葉は、「士たる者は富貴消息の事にも論ずべからず只信義をもて重しとす。」と、かつて宗右衛門が老母に初会したときに述べた「伯氏たる教え」の引き写しであった。さらに左門は、その考えに基づいて、商鞅菽座の例を挙げ、尼子経久に媚び仕えて、挙げ句に宗右衛門を幽閉した不義なる丹治を難詰する。そうした左門の言葉の主意は以下の発言に集約されていよう。

経久強てとゞめ給ふとも。旧しき交はりを思はず。私に商鞅菽座が信をつくすべきに。只営利にのみ走りて土家の風なきは。即、尼子の家風なるべし。

しかし、左門が丹治を難詰するその要点は、もとは旧主塩治の恩を省みずに自らの「営利」を優先して尼子経久に翻って仕え

たことにあるのであつて、宗右衛門を幽閉した事実には具体的に触れていない。つまり、左門の考える丹治の罪は、あくまでも丹治が信義よりも自らの保身を重んじたことにある。そして、その罪は、伯氏宗右衛門から授けられた考えに真つ向から反するものであり、そうした丹治の行動によって、結果的に宗右衛門は幽閉されることになったのである。それだけでも、左門にとつて丹治は、宗右衛門の命に引き替えるのに十分な存在であつたと言えまいか。

一方で、功名富貴や営利を重んじることは、一般的に言つて不自然なことではない。そうしなくては、人は生きる糧を得られないからである。そうであるならば、「死生交」における、妻子との日常生活の瑣事に紛れて約束の日を忘れてしまった范式の行動も、赤穴丹治が旧主の敵であるにも関わらず尼子経久の元にいたことや、丹治の導きで一時でも経久の許で過ごした宗右衛門の行動さえも、多くの読者にとつてはむしろ違和感の無いところであつたかも知れない。

六 おわりに

さて、丈部左門と赤穴宗右衛門の人物設定を軸に据えてここまで「菊花の約」を読み解いてきた結果、ようやく最初の問題に戻る段階に至つた。それは、冒頭と結尾に記された、「軽薄」な人と交流を結んではならない、との言説と物語展開との具体的な関連性の問題である。

第二章で述べたごとく、「軽薄」の語が「権勢利益のために

義理を欠く者」との意味を含むのであれば、ここに言う「軽薄」な人物は、左門、目録で見た場合は、旧主塩治の恩を顧みず翻つて尼子経久に仕えた赤穴丹治のような人物を比定する以外に考えられない。もし宗右衛門も丹治同様の人物であったならば、左門の前には姿を現さなかったであろう。しかし、宗右衛門は、第四章で述べたごとく経久の城下に「永く居るに益なし」と考えて左門との約束を伝えて出国を試みた。つまり、宗右衛門の心は、「營利」を優先して経久に従つた丹治をはじめ城下の家臣らの「軽薄」ぶりに靡いてしまうほど弱いものではなかったのである。それほど、左門と宗右衛門は、信義を重んじる信念によって固く結ばれていた。そうした二人の絆は田中則雄が指摘するような「非功利的な心的結合」（注15）であり、丹治や家臣たちの、ある意味功利的なつながりこそ「軽薄」の語で形容し得るものであった。さらには、この二人の絆は、木越治が指摘するように、二人が「自らに課せられた『信義』を果たすことより他に自己の生存の場所を見出しえない者」（注16）であったが故のものであった。

だが、二人の関係がその様な絆で結ばれるためには、それなりの必然性があったのである。それは、それぞれの生活力の欠如である。あるいは、経済生活への無関心である。二人の境遇は、学問以外に身を立てる術を知らぬがゆえに、先行きの見えない状況にある点で共通していた。よって、とくに左門にとっては、宗右衛門からの「教え」は、母が述べた如くうだが上からずに見失いつつあった自らの生きる道を、唯一照らす光明のごとくに映つたのではなかったか。それだけに、それを断た

れた時の左門の恨みは、丹治を衝動的に斬り捨てねばならぬ程深いものであったことは想像に難くない。

ところで、第四章では、経済活動をする行人の描写の意味について言及した。秋成の時代は、武士であっても経済活動に無関心でいられない時代であった。むしろそれが、下級武士たるものの生きるすべであったと言えよう（注17）。しかし、そうした時代の変化の流れの中で、家の存続をも顧みず清貧に生きんとする左門や、「信義」に固執して、主たるものへの庇護の元に入らず浪人の身を通さんとする宗右衛門の生き様は、多くの読者の目には時代錯誤に映つたのではないだろうか。そうであるなら、冒頭及び結尾の「教訓」は文字通りの「教訓」にはなり得ず、木越治が言うごとく「無意味化」（注18）する。それどころか、この兄弟の物語は、「信義」を主題とした結果として、かえってシニカルな物語として読まれる余地が生ずると言えよう。

なお、最近では、結尾の「兄弟信義の篤きをあはれみ。左門が跡をも強て逐せ」なかつた経久や、物語に付された本文と関連しない挿絵に着目した飯倉洋一は、その後の「吝軽薄の人と交はり結ぶべからずとなん」の「となん」の主語を経久として、そこに経久の信義への気づきと改心を読んだ（注19）。さらには、その経久の唯一の「腹心爪牙」の家臣であった山中党の山中鹿之助も『陰徳太平記』巻五六に記される事から、この物語が『陰徳太平記』の異伝あるいは外伝という体裁をとっていたことを井上泰至が指摘している（注20）。そうした解釈の妥当性について本論で論じる準備はないが、この物語を、

あえて「兄弟信義の篤き」に同情した経久の描写で結んだ秋成の意図を推測するに、首肯し得る読みではある。しかし、そのように解したとしても、この「菊花の約」物語の主題が、左門と宗右衛門の「信義」にあることは揺るがない。その「信義」が生じた背景には、二人の孤独と困窮の実情があり、そうした状況において、「軽薄」に陥る多くの人々を余所に、二人は「信義」をつらぬき通した。むしろそれが当代に稀となつてしまつた人の精神性を表現したものであつたならば、それに気づいたのが仮に経久であつたと解したとしても、同時に結尾の「とん」が秋成の嘆息でもあるように聞こえてしまうのは筆者の僻耳であろうか。

- 注1 以下「死生交」の引用は、『上田秋成研究事典』（笠間書院 二〇一六）所収の、丸井貴史による校訂本文を用いる。
- 注2 「信義の行方―『菊花の約』論―」「文化」七三号 二〇一〇・三
- 注3 「菊花の約」の論―雨月物語の再評価（2）―『松田修著作集』第八巻 右文書院 二〇〇三 所収
- 注4 「菊花の約」私案『秋成論』ぺりかん社 一九九五 所収
- 注5 「『雨月物語』『菊花の約』解釈の諸問題―テキストの解釈行為分析・テキスト解釈生成学を目指して―」「高知大國文」四三二号 二〇二二・一二 十二頁

- 注6 「『菊花の約』の読解―近世的な読みへの試み―」「テキストの読解と伝承」大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座 二〇〇六 十三頁
- 注7 本文及び書き下し文は新釈漢文体系『唐詩選』（明治書院 一九六四）による。
- 注8 本文は「早稲田大学古典籍総合データベース」（請求記号イ一七―二〇一四）所収の天明二年版によつた。
- 注9 「『軽薄の人』は読者なり―『菊花の約』を読む―」「雨月物語論」笠間書院 一九九九 所収
- 注10 『雨月物語』上、講談社学術文庫 一九八一 九五頁
- 注11 『幻妖の文学 上田秋成』三一書房 一九八二 二五頁
- 注12 『雨月物語 癡癡談』新潮社 一九七九 三四頁
- 注13 『雨月物語』筑摩書房 一九九七 九五頁
- 注14 『雨月物語評釈』角川書店 一九六九 一四五頁
- 注15 「庭鐘から秋成へ―「信義」の主題の展開―」「読本研究」第五輯上套 溪水社 一九九一・九
- 注16 「『菊花の約』私案」『秋成論』ぺりかん社 一九九五 所収
- 注17 武家の経済生活の実態については磯田道史『武士の家計簿』（新潮新書 二〇〇三）等に詳しい。また、丸山真男は『日本政治思想史研究』（東京大学出版会 一九五二）にて、徂徠が着目した武家の困窮の淵源について論じている。また、秋成よりやや後の文化十三年の奥書がある『世事見聞録』（岩波書店 一九九四）「武士の事」には武家たちの経済的、精神的な凋落ぶりが詳

細に描かれている。そのうちの一部を以下に引用する。

一体、当世賄賂のこと流行して、重役なるものの目鑑として、人を挙用いたすにも正真の目鑑を用ひず、主人のためよりも我が心に叶ひたる人物を依怙鼻肩するなり。(中略) また重役なるもの、当世は多く軽薄なるもの故、廉直なるを遠ざけ、追従なるを近付くる振合ひにて、善人を見捨て悪人をのみ挙げ用ふる(五九頁)

注18 注15前掲書 三三九頁

注19 『上田秋成 絆としての文学』大阪大学出版会 二〇一二 二二二頁

注20 『近世刊行軍書論』笠間書院 二〇一四 二六六頁

「付記」「菊花の約」本文の引用はすべて『上田秋成全集』

第七卷(中央公論社 一九九〇)によった。ただし、清濁を私的に改めた個所がある。